〝歴史と伝記と〟

服部良一

この一文は「歴史と伝記」の関連について明確な概念規定を試みようという大それたものではない・そこはかとなく、平素

思い付くことを書き列ねて、「ふびと」の若い読者たちに、伝記乃至自叙伝に親しむよすがともなるなりと、敢えて「歴史と伝記と」と余計もの「と」つきの不安定な題目をつけてみた次第。名は体を現わし、はなしの内容は頗るつきの頼りないことで、唯々申訳けない仕儀である。

さて先ず歴史教育（主として義務教育課程における）について一瞥してみよう。戦後の歴史教育に対する一般的不満は「集団あつて個人なし」というところに端的に表現されよう。それは戦前の国史教育が逆に「個人あれど集団なし」と批判されたのと対蹠的である。戦前の「国史」が教育性を強調して、児童の心的発達段階を重視し乍ら、国体護持という政治的奉仕性のなかに埋没し了る。その反動として戦後の歴史教育は、科学的真実を追求するあまり、社会的・経済的集団性の潮流のなかに、歴史に働きかける個人を喪失したのである。こゝに今後の歴史教育の課題がある。従来反発する力でしかなかつた教育性と科学性が止揚され、その相補性を恢復することが当然の帰結として要請される。それはまた、分裂した個人と集団が歴史教育の新たな系列のなかに統合されることでもある。一層現実的には、その可能性は表われた人物の再発見にあるとも云えよう。人物の再発見に次の二つの方途が想定される。すなわち、その一つは、歴史の新しい鉱脈に魅力ある人物像を発掘することであり、他の方途は過去の歴史教育が捨て去つた人物群を再吟味して、民主主義の篩にかけて、適うものを保存することである。発掘と保存によつて、新しい価値を認識された人物群は、教育の領域に多様な興趣を鏤ばめるであろう。

歴史学は、無時間的・求法則的臨つて抽象的普遍性を追求する自然科学と異なり、個性記述的な学問である。この個性追求は科学性と、文学性という矛盾する二面性を負うケンタウルだとも考えられる。この二面性を敢えて区別するとしたら、事象的個性は一層科学性に依拠して、歴史の正統性を主張するだろう。そして歴史を彩どる人格的個性は　より文学性に傾斜するものと云うべきであろう。伝記・自叙伝の類が、如何に客観的描写に優れ、挿話的興味を歴史に提供するとも、より文学性に連なるものとすべきであろう。

自ら「英国史」の著者である哲学者ヒューム D. Hume（1711～76）が若き日、文学書を求める恋人にプルターク Plutarch（46?—122 A.D.）「並行列伝」を贈つて絶交を申し渡されたと云う。確かに伝記は文学ではない。さりとて歴史の範疇でもない。いわば文学と歴史の間を行く独自な領域を有つと云えよう。プルタークはアレクサンダー大王伝の冒頭に伝記作者としての自己の立場を次のように述べる。すなわち、「余の試むるところは、伝記を書くのであつて、歴史を記すのではない。であるから、伝記作者という立場から眺めれば、大事業や大戦争が必ずしも人間の心の中にある善と悪とを明瞭に示すとは限らない。むしろ些細な事件・ふとした言葉の末、一つ二つの冗談などの方が、成を陥れた話や、屍の山を築いた大合戦の記述よりも、より適切に、人間の性格や傾向などを現わすからである。画家に譬えてこれを云うなら、一枚の肖像画を描こうと思うときに、人間の足や胸や手を、そう細かく写すよりも、小さい部分ではあるが、顔だけに全力を集中して

、顔の形や線々表情などを詳しく出すようなものである」と。

プルタークが歴史と区別して、逸話的手法により生彩ある個人像を描かんとした伝記の立場は明瞭であろう。並行列伝は道徳学者とされるプルタークの晩年の作である。（一〇五？―一二五？）列伝は類似行為のギリシア・ローマ人を並べて描写し、その後両者を比較論評する形式で、二二組四六人（ブラックス兄弟対アーギスとクレオメネースの比較を含む）を対比している。彼が列伝を著作した目的は、軍事的優越にギリシアを征服したローマに対する、文化的優秀性にローマを教化したギリシア、両民族の相互理解を深めんとするにあった。

しかし、仔細に見るとき、彼の本来的なギリシア主義を随所に指摘し得るであろう。相似の人物を比較し下り、何気なく、ふと覗くギリシア中心主義は、彼がボエオチアのケーロネア生れ、生粋のギリシア人である以上、当然のことである。そう云えば、先ずギリシア人が挙げられ、次いで相似のローマ人が述べられている形式も、その現われであろう。ともあれ、この著作には著者は、心血を注いで、万全の準備をした。彼は多数の文献史料を渉猟した。現時の並行列伝の分析から、彼がギリシア史家百十一人の書を参照し、また四十余人のラテン書を検討したことがわかる。個々の伝記をみても、アレクサンダー伝一八種、テセウス伝一五種、ロムルス伝一八種、リクルグス伝二〇種以上と実に豊富な文献史料を駆使している。すぐれた民族的英雄に手材して、一般人の道義的啓蒙を志した列伝著作におけるプルタークの研究熱心は、やがてそれは他人のためでなく、自らの喜びでもあることを悟るに至る。アエミリウス・パウルス伝のなかに「私は他の人々のために数々の伝記を書くことに着手するようになったのに、今では歴史を鏡のように使って、そこに書いた人々の徳性を手本とし、自分の生活をそれに近づけて飾ろうと努めているところから、自分のためにもこの仕事を続けるのが嬉しく思われるようになった。というのは、私の仕事はこういう人々と一緒に日を暮らし、一緒に生活しているようなもので、恰度その一人一人を歴史を通じて順番に客として迎え、席を共にして、どんなに偉い、またどういう風な人であるか、を観察し下り、これらの人々の行動から最も重要な立派なところを知ろうとするのである。おやおや、これより大きな喜びが貴方に得られようが、且つ倫理的な性格を改善するために、これよりも有効な結果が得られようが」と述べるのである。

プルタークは実に四六名の対比について、典型的な英雄・偉人のみを選定する単調さを避けて、邪悪の人を採り入れ、全体の構想上の変化を配意する。これも一種の文学的考慮となすべきであろう。すなわちデーメートリオス伝のなかで、彼は次の如く述べる。

「私も一部のものゝ曲っている癖を見て、人々を正すのが大して親切だとも、国家のためになるとも考えてはいないが、無思慮な生活をして権勢を握り、国家の顕要な地位に就いて、邪悪を　にしている人々を恣にしている人々を一組か二組伝記の中に取入れることは、恐らく不当ではあるまい。勿論自分の書き物に変化を与え、読者を喜ばせ、楽しませようというのではなく、テーバイの人イスメニアースが弟子たちに上手な笛吹き

と下手な笛吹きを示しては、いつも「こういう風に吹かなければいけない」とか「こういう風に吹いてはいけない」と云ったり、アンティゲネイダースが若い人も下手な吹き方を経験して置けば、上手な笛が一層快くきけると考えていたが、それと同様に私も、我々が非難すべき邪悪な生涯の事を何か知って置けば、優れた生活に対して、一層熱心な観察者になれると思う」と。人生の善悪表裏を描き分けることによって、人間の多様性をレリーフしようとした彼の意図は明白であろう。

歴史の文学性についてツヴァイク Stefan Zweig (1881～1942) は次のように述べる

「検証に厳しく縛られて動きのとれない研究が終るところで、自由奔放な魂の直観的方法が始まる。古文書が用をなさないところで心理学はその眞価を発揮しなければならない。心理学によってから復られたまことらしさは、書類と事実の裸のまゝよりが屢々より眞実に近いのである。若し我々が歴史において記録以外の何ものも持たないとしたならば、歴史は如何に狭く、如何に疎漏なものとなっているのであろうか。一義的なもの公然なものは科学の領域であるが、多義的なもの、先ず解釈され、解明されるべきものは、読心術本来の緒張りである。紙の上だけの証明をなす資料が不充分である場合にも、心理学者にとっては、測るべからざる幾多の可能性が依然として残されている。感情というものが、人間については凡ゆる記録以上に常により多くを知っているのである」

以上は彼の傑作「マリー・アントアネット」から引用したのである。ツヴァイクはウイーンに生まれたオーストリアの作家戯曲、評論、小説をものしたが、ナチ政权後、英国に亡命、次いで米国に行き、更に南米ブラジル首都リオ・デ・ジャネイロ郊外で妻と共に自殺、悲劇的な最期を遂げた人である。彼がその作品の全翻訳权を譲渡するにあたり、訳者に特にこの日本訳を勧めている点からも、彼の会心作たるを知り得るであろう。物語はマリー・アントアネット Marie Antoinette (1755～93) を廻るスエーデン出身のフェルゼン伯爵 Hans Fersen (1755～1810) との悲恋を彩なし、革命の波浪のなかに悲劇的運命を辿る姿が躍如として描かれている。この作品のためツヴァイクはオーストリア公文書を漁り、フェルゼンの日記を探ぐり等、実証的研究の結果、その力作が生まれたのである。以上プルタークやツヴァイクを通じても、優れた伝記作品はその文学的個性を歴史性乃至科学性によって裏打ちされていることは自明であろう。

E・H・カー Carr が「歴史とは何か」のなかでウエジウッド女史 Miss Wedgwood の「個人としての人間の行為の方が集団や階級としてのそれらよりも興味深い」と述べたことを引用し乍ら、それがとかく「クレオパトラの鼻が低かったら、世界史は異ったものとなったろう」流儀の偶然性の過大視を戒めている。そうした観方は、スチュアート両王の無能が英国革命を招いたとするような錯覚を生ずる。事実は歴史的必然であろ。個人的恣意によって、歴史的発展の大勢を覆えすことは可能ではない。

歴史における個人の意義を強調した人物として、我々は二人の名を指摘せねばならない。

すなわち、ヘーゲル G.W.F. Hegel（1770～1831）とカーライル Thomas Carlyle（1795～1881）である。前者は個人をロゴス的領域から、すなわち哲学的省察を施し後者はパトス的分野から、何れかと云えば文学性に傾斜しつゝ、それへの愛を深めたと云えよう。

ヘーゲルの場合、個人は自己民族の一定の発展段階におけるその民族の子である。何人も大地を超出し得ないように、その民族精神を超出することはできない。個人はその民族が要求する意志を自己の内部で意識し、発表しなければならない。ヘーゲルは歴史の行程に保存と破壊の二途を指摘する。すなわち、前者は一民族、一国家の保存及びその生活の秩序及びその生活の秩序立てられた諸領分の保存である。そして諸々の個人の活動は、彼らがその共同の事業に参与して、特殊な種々の領分におけるその事業の産出を助けるということである。これが人倫的生活の保存である。これに対して後者の場合、現に存在している一つの民族精神が自己を掴み尽して完成してしまったために、その民族精神の存立が突き破られるということ、世界史、世界精神が進行するということである。こゝでは人倫的全体の内部における個人の地位及びその個人の道徳的所行、その個人の義務については濁れず、自己自らのより高い一つの概念に向って精神の教養の進歩、前進、自己昂揚のみを問題とする。それは精神の概念が自己のために作り上げていた以前の現実仕方の貶黜、粉砕、破壊と結びついている。これは一面に於ては理念の内的発展のなかで行なわれるが、他面に於てはこの理念の発展そのものが一つの人為的な発展であって、その発展の行為者となって、その発展の実現を産み出すものは、諸々の個人である。現に存立して承認せられている諸々の義務、法律及び权利と諸々の可能性――この現行の制度に対立して、それを侵害し、更に進んでは、その根柢と現実性とを破壊して、然も同時に、同じく善であるようにも見え、大体に於て有利な、本質的な、且つ必然的なものであるようにも見える一つの内容を有っている可能性――との間に諸々の大衝突が発生する。それは現に一民族又は一国家の存立の基礎を成している一般者とは異なった種類の一つの一般者を自己の内部に包蔵している。この一般者は生産的理念の一契機、自己自らを求めて努力精進している眞理の一契機である。かゝるより高い一般者を掴んで自己の目的とし、精神のより高い概念に適応している目的を実現する者は、諸々の偉大な世界史的個人である。彼らはその限りに於て英雄と呼ぶことができる。彼らは自己の目的と職分とを、平穏な、秩序立てられている制度、神聖視せられている事物の進行のなかから受取る者ではない。彼らを正当ならしめる根拠は、現存している状態のなかには存せず、他の一つの源泉から掴み出されて来るのである。それは隠れたる精神であって、その精神は現在の扉を叩いているけれども、尚地中に埋もれて、未だ一つの現在的定在にはなっていないで、そこから脱出しようと欲している。世界史的個人は、目的を追求して自己満足はするが、ことばの普通の意味に於ける幸福ではない。時代に先駆する個人の運命は悲劇的でさえある。

次に我々はカーライルを観るべきである。デイルタイ Dilthey も曰う如く、彼は歴史叙述に於ける伝記の位置を高めた最初の

人物である。歴史的個人――英雄の意義を情熱的に鼓吹した最初の人である。「英雄崇拝 Heroworship」の語は、本来ヒュームの造語であるのに、彼がその本家本元のように考えられているのは、彼の「英雄及び英雄崇拝（一八四一年）」が洛陽の紙価を高からしめて以来である。その著作は前年五月、友人が彼の窮乏を救う目的を以て、催した六回に亘る連続講義内容を出版したものである。しかし、彼はその以前の「フランス革命史（一八三七年）」から英雄待望の思想を発揮している。その後も彼は「クロムエル O. Cromwell の書簡、演説集（一八四五年）」「ノリードリッヒ大王伝（一八五八―六五年）」の成功により、その名を不朽にしたのである。特にクロムウエルに対する憧れは、伝記著述の希望を放棄して、純粋に「本来それはどうあったか」とするランケ的立場に謙遜して、書簡と演説を編集し、その間、短い感想を挟むに止めている。従来のトーリー的クロムウエル観を彼を真の民主主義者とするウイッグ的立場への転換はカーライルに影響されること、少くはなかった。

ところで、伝記乃至自叙伝は如何にして発達したか。ベルンハイム E. Bernheim は次のように指摘する。伝記は墓誌銘・弔辞・歴史著作中の人物描写の詳しいものから発達して、ギリシア人やローマ人にあって、殆る完全な姿で現われているような一個独立の文学種類となった。中世に至り、聖者伝数多く出るも、写実的な生彩ある伝記は乏しい。ルネサンス以来、伝記は特に発達して、一層大なる自由さと、内面性をもつようになる。伝記の一変種としての自叙伝は高度文化の時代にのみ現われるものであり、近代自我のめざめと関連する。そして、ベルンハイムは次のように警告する。伝記が同時代人の直接知識から出ている限り、その著者は主人公に味方すること幾分偏頗であり、或は少くともその事件に対する主人公の関与を、それら事件の事実上の経過に相応するよりも大きく思わせる。これはいつも伝記の特徴の然らしめる処であるが、自叙伝にあっては、勿論その程度が一層甚だしい。加之後者は往々純粋に歴史上の真実を伝えることを敢能としないで、むしろ芸術作品になりたがり、小説めいてくる。として、これらの作品の誇張乃至主観性を注目するのである。

次に自叙伝について実例を挙げながら、その性格を究めてみたい。一般伝記が、作家が関心をもつ対象について叙述して、広く一般読者によまれることを期待しているのに対し、自叙伝は当初、限られた少数の人たち、筆者の親しい友、子孫などしか読まれることを予想していない場合が多い。尤も出版文化が進んだ今世紀になると、自叙伝も最初から公開を目的としている場合もあるが……。福沢諭吉〔一八三五年（天保六）～一九〇一（明治三四）〕の「福翁自伝」は述記者に口述して、明治三一年七月から翌年二月まで時事新報に六七回に亘り連載したもので、公開自叙伝の初期の事例であろう。

新井白石〔一六五七（明暦三）～一七二五（享保一〇）〕は六代将軍家宣七代家継二代七年に亘る文治時代の主導者であるが、彼の自叙伝「折たく柴の記」はその致仕の正徳六年（一七一六）に筆を起しているが、その序文に次のようにのべる。

「むかし人は、いふべき事あれば、うちいひて、その余はみ

だりにものいはず。いふべき事をも、いかにも、ことば多からで、其義を尽したりけり。我父母にてありし人々も、かくぞおはしける。……かくおはせしかば、あはれ、面まじりせばやとおもふ事も、いひ出がたくして、うち過ぐる程に、うせ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる……おやおうぢの御事、詳ならざりし事こそくやしけれど、今はとふべき人とてもなし。此事のくやしさに、我子共も、また我ごとくの事ありなん事をしりぬ。今はじとまある身となりぬ。心に思い出るをりをり、過ぎにし事ども、そこはかとなく、しるしをきぬ。外ざまの人の見るべきものにもあらねば、ことばのくたなきをも、事のわづらはしきをも、えらぶべしやは。……我子うまこの後までも、これりの事ども見むものは、おやおうぢの身を起せし事も、やすからず、おやにてありしもの、前代の御めぐみをうけし事は、よのつねならざりし事をも、おもひしる事もありなむには、忠と孝との道にもたがはざる事もありなましと、六十の老翁、散位源　丙申の十月四日に筆を起しく」と。以上によりて、史癖を有する白石が寡黙な両親から、自己の家系について何ら聞かされなかりた無念さを推して、子孫のため自らの事歴を叙して、教訓を遺そうとする彼の態度が覗えよう。自らを叙ぶるに当たり、断片的な父の逸話から筆を起こしているのは、祖先の事績を明らめんとする精一ぱいの努力でもあったろう。白石の父は四才で母と死別、九才で父とも死別、隨って「父母の御事、詳なる事はしらぬ也」とする孤独の人であり、白石の母についても「我母にておはせし人は、いかなる人の子にて、おはしけるやさだかならず」と告白しなければならぬ。それについて彼は弁護する「昔のやむごとなき人も、すぢなきものゝ暇にやどり給ふためしは、いにしへも今も多かるものを、母の父母の御事しり給はぬとも、なにかはゞかしき事あるべき」と封建的な腹は借物的思想を例証とする。彼の母は相当な教養人であったようである。父は四〇才を過ぎて起えて、一五才年少の母を迎える。四女一男が生まれるが、姉も妹もみな若死して、父五七才、母四二才にして生まれた彼のみが育く。明暦三年の、大火の直後、生まれし故に「火の児」と云われた白石の生涯は、まこと烈々たる火のような奮斗的展開を遂げるのである。白石にとくて、この自叙伝は「外ざまの人の見るべきものにもありねば……」と非公開を前提としているが、それは必ずしも絶対的拒否を意味しない。寧ろ、生涯をひたむきに生き抜いた人々が自覚するその人生を描写する無遠慮な一つの形式とさえも見られようか。

自伝を著する場合、その一般的特徴として、上述の「折たく柴の記」にも見られるように自己の人生の大事業を遂げた人の回顧録の性格をもつ。隨って、それは多くの老境に入った人たちの閑暇を得ての懐旧であり、自己中心的な若干の誤解や記憶の不確さを示すとしても已むを得まい。成功者の常として、彼らはオプチミズムの立場から、自己の人生を肯定する。再び同じ人生を繰返すも悔なしとさえ彼らは云う。こうした自惚れの感情は、彼を祖先として有ることを誇と感ずるであろう子孫を懐うとき、最も無邪気に昂められる。かくて自叙伝は、自己の体験を通じての教訓の書として提供される場も出て来る。

アンデセン H.C. Andersen (1805～75)は周知の如

く、デンマークの著名な童話作家である。その自伝は最初に出されたのは、一八四六年数え年四二才までが書かれている。貧しい靴職人の子として生まれ、よき庇護者を得て、コペンハーゲン大学生を卒え、作家として、漸く名を成すまで、生涯の最も波瀾に富む時期である。彼は生涯独身であっただけに、処世の書として、子孫に教訓を垂れる必要もなかった。少年のような澄んだ眼で、周辺の善意に感謝し乍ら、童話のように自らの生い立ちを語るのである。

「私の生涯は大変事件の多い幸福な一生であった。それはさながら一篇の好ましいお伽話である。貧しい少年だった私が一人で世の中へのり出した当時、人間の一生を思いのまゝにする仙女が現れて『お前は自分の進みたいと思う道と志とをお選びなさい。そうしたら、お前の心の育つにつれて、この世の道理に叶うように、お前を守って導いてあげよう』といわれたとて――私の運命はこれ程までに幸福に、賢明に、そして上手に導かれはしなかったろう。私の身の上話が語ろうとする事は、世間が私に教える事と同じである――この世には悲惨深い神様がいまして、一切の事を出来るだけ良かれとお導きになる……」と。アンデルセンほど無邪気でないとしても、フランクリン（Benjamin Franklin 1706～90）の場合も楽天主義の点に関しては全く共通である。貧困の中から身を起こし、独立革命の際には遣仏大使として老躯を extra して活躍し、フランスを参戦に踏切らしめた人、彼のフランス大蔵大臣を勤め上げた啓蒙の文化人チュルゴー（Anne Robert Jacques Turgot 1727～81）をして「空から電光を捕え、圧制者へ英ジョージ三世）から笏を奪い取ることのできる人」と称えしめた人、フランクリンの自伝を若干考察してみたい。その自伝は一七七一年、彼の六五才のとき稿を起している。すなわち、彼が英蘭南部ハンプシャの小村の親友の家に滞在中、若干の時間的余裕を得て、起筆、息子ウイリアム（William Franklin 1730?～1813）に話かける形式で話を進めている。この息子はニュージャージー知事をも勤め、独立革命に際しては、父と立場を異にして、英国に忠誠を誓い、後英国に移住した人である。自伝はその後一七八四年パリーに滞在中、未完の稿を継いでいる。その後帰米、フィラデルフィヤに於て更に書き継いで、一七八八～八九年に完成し、彼は孫に清書させ、二通の写しを作り、フランスの友人に手交、一七九一年フランクリン自伝の最初のものは、彼の死後一年にフランス訳として世に出たのであった。

その序文において、次のようにのべる。

「先祖たちの逸話を集めるのは、どんな小さな逸話でも、昔から私には楽しいことだった。お前も覚えているだろうが、私がお前と一緒にイングランドへ出かけた時、いまなおその地に残っている親類の者にくっついて調べたり、旅行したりなどしたのもそのためであった。同じように、お前にとっても、私のこれまでのことを知るのはうれしいだろう。その多くはお前がまだ知らないことなのだから。それにいま私はへんぴな田舎にいて、こゝ一週間はずっと暇でいられる筈だから、それで一つお前のために書いてみようと思って、机に向ったのである。尤もこの仕事をやってみたいと思う理由は他にもいくつかある。私は

貧しい賤しい家に生れ育ち、後、次第に身を起して富裕の人となり、或程度世間に名を知られ、且つこの年になるまで、かなり幸運に恵まれて、日を過してきたが、子孫の者からすれば、そうなるまでに私が取り用いた有益な手段――それは神さまのお蔭で大そう成功したが――その中には自分の境遇にも役だち、従って真似したらよいと考えられるものもあろうから、その手段を知りたいものだと思うことだろう。私はこの幸運な生涯を振返ってみて、時に次のようなことが言いたくなる。『もしもお前の好きなようにしてよいと言われたならば、私は今までの生涯を初めからそのまゝ繰返すこと少しも異存はない……』こうした繰返しはできぬ相談だから、その次に一つの生涯を生き直すのに最も近いことはと言えば、生涯を振返り、そして思出したことを筆にして、できるだけ永久のものにすることではないかと思う。それにまた、こういうものを書けば、老人によくある身の上話や手柄話ばかりしたがる癖を満足させることができもしよう。……私は多分大いに自分の自惚れをも満足させることだろう。……自惚れというものは、その当人にもまたその関係者にも、屢々利益をもたらすと信ずるからである。隨って人生の他のさまざまの楽みと共に、自惚れを与えて下さったことに対し、神に感謝するとして、多くの場合、必ずしも道理にあわぬことではあるまい」と手放しの楽天主義と、繰返すとも悔なき奮斗的生涯に対する回想態度は、この人の場合も典型的な老人的性格を示している。

シュリーマン（Heinrich Schliemann 1822―90）の場合、その自叙伝は独立したものでなく、トロヤの発掘報告書「イリオス Ilios」の序文に書かれたものである。すなわち、一八七九年彼の五七才の頃である。学術報告書が自叙伝から始まるというのも異例であるが、

「この著書を私の身の上話から始めるのは私の自惚れのためではなく、わが後半生の仕事の凡ては幼少年期の印象によって定められたこと、いや確かにそれらの印象の必然的な結果に他ならないわけを明らかにしたいからである……トロヤやミケネ諸墳墓を発掘した私の歓とは、わが幼少年期の最初の八ヶ年を過したドイツの小村にて早くから作られ、磨かれていたといってもよかった。それ故に貧しい幼少の時に立てた大計画を人生の秋に至って遂行させたその財産を如何にして私が獲るに至ったかを物語るのも強ち余計なことではあるまい」とする。彼は、北ドイツメックレンブルクの片田舎の牧師の子として育ち、昔話を好んだこの少年は、八才のクリスマスに父から与えられた「子供のための世界歴史」のトロヤ戦争物語の挿絵に魅せられ、幼馴染のミナ・マインケと将来手を携えて、トロヤ発掘を試みようと約束する。労苦の末、彼は藍商人として国際貿易に成功する。事業をやめその富を以て一八六四年、世界一周旅行に出る。その途次、日本にも立寄る。彼の最初の著者「支那と日本」がフランス語で出版される。

その後、彼は小アジアにトロヤの遺蹟を求め、ヒッサリークの丘を指定して、鍬を入れる。一八七一年、彼の五〇才のときである。そして、その成功、彼の発掘は更にミケネ・チリンスへと拡がる。八才の童心は一つの執念に変かれて、四〇余年後豊かなみのりを収めたのである。単なる「宝探し」から偉大な

「考古学者」へと彼の自成はやまない。彼は「神話」を「歴史」に変えたのである。単なる伝説でしかなかったメロスを実在の歴史にしたのである。従来、ギリシア史の上限を前八世紀にしか溯り得なかったものを、シュリーマンの鍬は、その歴史を更に千年以上も溯らせたのである。我々は、シュリーマンの姿に偉大なロマンチスト、強固なリアリストの歩みを想うであろう。

我々は自叙伝を廻る冗長な談義によい加減に終止符を打つべきであるが、最後に英国の代表としてギボン（Edward Gibbon 1737～94）を挙げてみたい。彼の名を不朽にしたのは、その名著「ローマ帝国衰亡史」のためである。彼の自叙伝「我生涯と著作との思い出」は五二才、一七八九年すなわちフランス革命勃発の年までが書かれている。彼の生涯は比較的波瀾のない平穏なものであった。若干の波瀾と云えば、一五才でオックスフォード大学モードリンホールへ入学したが、一四ヶ月後、彼がカトリックに改宗した理由を以て、退学させられたぐらいであろう。その結果、父は彼をスイスのローザンヌにおけるカルビン派牧師宅に預ける。五年に亘るスイスの生活でカトリックからも卒業、ローマの古典をよみ、後年の「ローマ帝国衰亡史」への基盤は築かれたと云ってよかろう。ローザンヌ時代、彼はウォルテールと面識したことも、青年ギボンに感激の材料であったろうが、その最大なものは、スーザン・キュルショーとの初恋であった。その恋は彼の父が結婚を認めなかった故に、はかなくも散る。彼女は後にフランス大蔵大臣・首相を歴任したネッケルの妻となり、二人の間に一女を儲け、それが後年ステール夫人として、ナポレオンに猶つく。ともあれ、ギボンは終生独身で徹した。二八才のとき（一七六〇）彼は義勇軍に投じ、カナダに赴く。一七七二年以後、「ローマ帝国衰亡史」に没頭、一五年を経て、全六巻のこの書は漸く完成したのであった（一七八七）この自叙伝にはフランス革命の行過ぎに対するエドムンド・バークの警告に「私も双手を挙げて賛成する言を言明しておきたい」とする点は卓見であるが、歴史家の限界において保守主義者であったと言えよう。

ギボンは自叙伝の序文に次のようにのべる。

「私は今年五二になるが、苦労の甲斐あって、世の好評を博した著作（ローマ帝国衰亡史）を書き上げ、多少の暇の出来たのを幸、市井の一文人の生涯に起った平凡事を一巨り眺めてみたい。ところで、本書よりももっと重大な歴史物語の第一の美点たる真実――剥出しの洗いざらいの真実ということが、この身の上話に於ても唯一の美点にならなければならない。文体は簡易、平易にしよう。だが、元来文体は性格の現れであり、特に努めたり、狙ったりしなくても、精密な文を書く平素の習慣から、自然、技巧や彫琢の外見を呈するかも知れない。又本来自分ひとりの楽しみというのが、執筆の動機であり、それだけで私の労も酬いられる。従って、この原稿は一部の理解ある寛大な友人には手渡しても、一般世人の眼からは、著者が非難や嘲笑の及ばぬ世界へ移るまで隠して置きたい。

一体我々の祖先たちのことを知り、これを記録に留めようとする欲求が、一般に極めて盛んな処を見ると、これはきっと人々の精神に存する或共通原理から来ているに違いない。我々は

何んだか自分自身が我々の先祖として生きていたような気持になり、この理想の寿命を少しでも長いものにしようとして、虚栄心が骨を折り、且つやがて満足するのである。我々の想像力は自然が我々を閉じこめた狭隘な世界を拡大しようと絶えず活動している。普通一人の人間には五〇―百年が許されるにすぎないが、我々は一面宗教や哲学の教える希望によって、死を超克し、他面、我々の生を創り出した先祖と結びつくことによって、我々の誕生以前に在る沈黙の空虚を充実させる……」として次いで、彼は家門の矜持について述べ、孔子の家系は二千二百年以上も、支那帝国の中に継承されて来たと論じ、更に、「こうした家系を誇る気持が正当だ。或は少くとも自然だ。ということは、私自身、自分の祖先から、栄誉も汚辱も引出せないで、この主張に直接無関係であるだけに一層実実と考えたい。とはいえ、私自身の生活について、有りのまゝ率直に語ることは、私の暇な折々の慰みとなるだろう。尤もその為、自惚の強い奴だとの非難を蒙るだろうし、恐らくその非難は当っているであろう。しかし乍ら、過去及び現代双方の経験よりして推して、民衆は常に何か精神の像を死後に残した人々のことを知りたがるものだと断定できるように思う。そういう人々に関する極く乏しい記述も熱心に編纂され真剣に閲読されて居り、どの年級の学生でも、自分のに似通った生活から教訓や手本を得ることができる。

私の名は今後英国人名辞典の夥しい項目の一つに加えられるであろうが、この私自身以上に私の思想行動の系列を描き出せる者は他にないと考えざるを得ない」として、彼は次に、ヒュ

ーム、チュアニュー、少プリニュース、ペトラルカ、エラスムス、モンテーニュ、サー・ウイリアム・テンプル、ベンヴェヌート・チェルリーニ、コリー・シバー、聖アウグスチヌス、ルソー、ユエー、ゴルドーニ、ウイストン、ニュートン監督、ミシェル・ド・マロール、アントニー・ウッドの自叙伝、書簡集・随筆・告白・回想記・語録などは、それぞれ個性的な自画像を描き、価値あるものとするも「私がこれらの人たちの誰かに比肩する、或はこれを凌ぐということは謙遜や矯飾のためと雖も、伴り隠そうと思わない」と自負するのである。

ギボンは自叙伝のなかで、彼の家の財産に関しても述べる。「もし私が更に貧窮か又は更に裕福な境遇にあったならば、実家の仕事を完成し、実家の名声を得ることができなかったであろう。若し私が貧乏して人に軽蔑されゝば、私の意気が挫けたであろうし、もし余計な財産を持って苦労し、贅沢をすれば、勤勉が弛んでいたかも知れない……」として、自らの今日あるをその出自の中産階層の故に帰しているのである。

彼は自伝の末尾に近く、次のように書綴って自らを幸運児と認める。

「人間一般の運命をよく考えてみると、私は人生のくじ引でよいくじを当てたことを認めねばならない。地球の大部分には野蛮状態や奴隷制度が一面に広がって居り、文明社会でさえ、最も数の多い階級は無知と貧乏に陥って動きがとれぬ有様である。文化の進んだ自由な国で、しかも名誉ある裕福な家庭に生まれたという二重の幸運は何百万に対する一という仕合せな運り合せである。又新たに生まれた嬰児が満五〇才まで生き延び

ない確率は略ゞ三対一である。今、私はその年令を通過したのである……」と、文明社会のよき階級に生まれ、健康も維持され、ライフワークも遂ぐることを得たというべきであろう。さるにても、未来という不可解なものを展望しようとするとき、彼の楽天主義も雲ゞざるを得ない。

「現在は、疾過する一瞬であり、過去はも早存在せず、未来の展望は暗く疑わしい。今日がひよつとして、我最後の日かも知れないが、かの一般には極めて眞実であつて、然も個々には極めて誤つている確率の法則によれば、私はなお一五年ばかり許されている。やがて私は……長き生涯中最も愉快な時期として送ばれた年輩に入るであろう。……人間の精神的幸福は円熟の時代即ち、我々の感情は鎮まり、義務は果され、野心は満たされ、名と富は堅い土台の上に確立されると考えられる年令に達して得られる……この人生の秋の清福はヴオルテール、ヒュームその他多くの文学者に実例が見出されるであろう。私はこの愉しい学説を疑うどころか是非採用したい」と自らの期待される老境を描いている。しかし、専ら過去を語るに得意な歴史家にとつて、未来を語ることが、如何に心許なく、空疎に感じられることか、彼は充分知つていた。彼が「ローマ帝国衰亡史」の最后の頁の最后の数行を書き了えた、一七八七年六月二七日夜十一時過、すでに四年前生涯の住家として移り来しスイス、ローザンヌの彼の庭の四阿を出て、低徊した。湖や山々の見渡せるアカンアの遊歩道、空は澄み、月光が湖に映する静寂の中を、そのときの感慨を彼は語る。

「私は我自由を取戻したこと、又恐らく我名声を確立したことによる、初めのうちのよろこばしい感激を隠そうとは思わない。しかしながら、気の合つた古い馴染と永久に別れたし、わが「ローマ史」の今後の寿命はどうあろうと、歴史家の生命は短かく儚いに違いないと思うと、我が胸も忽ち挫け、私の心にはしんみりした憂愁が一面に拡がつた」と。この感傷は勝利者の哀感とも云うべき、一般的な感情と看過できるかも知れない。

彼は自らの伝記を叙して、一五年の老境を期待したが、なお用心深く「私は精神又は肉体が早期に衰弱するとは考えないが、時の短かくなるのを望みの叶わぬのとこの二つの原因が、常に人生の黄昏を一層暗い影で染めるということは、不本意ながらも申さねばならない」として、その手記を了えたいのである。

天は彼に一五年の歳月を仮さなかつた。五年後、一七九四年一月十六日五七才にみたず、ロンドンで逝去したのである。すなわち、一七九三年親友シェフィールド卿の夫人死去弔問のため、帰英して、その翌春のことであつた。

さて、ギボンの死を以て、私のこの論文にも頓死を与うべきである。

結論も別段に必要としないであろう。できたら、読者の感想と云つたものをきいてみたいとも思うが……。

（S・四二・七・一七・未明）

※　文中引用の伝記・自叙伝は、ほとんど岩波文庫を使用した。

諸君の読書心を誘発したいためである。

以上